

動 い て い る 教 会

牧師 山本 護

エンジン草払い機の扱いが大分うまくなった。その一方、花をつける前の山野草も分かるようになって、草刈りに時間かかるようになりました。とはいえ、目当ての山野草を残したつもりでも、翌年は消えてしまうことがあります。たとえば誰もが知っているホタルブクロ。昨年群生していた所には見られず、集団で引っ越したかのように、礼拝堂の十字架の傍らで咲いているのではないですか。

『動いている庭』(みすず書房)。これは G.クレマン(1943～庭師、修景家、小説家)の主著です。クレマンが提唱するのは「いかなる形にも定められない存在としての庭」。つまり庭の植生は、風や鳥や昆虫によっても自然に変貌していくので「できるだけそれに合わせて逆らわない」という庭づくり思想、と言うか心構えです。



八ヶ岳教会の庭は、あらゆる植物の根を抜かず、篠竹や丈のあるイネ科の植物、はびこる蔓性のものは注意して刈り、植生の移動はそのまま放っています。クレマンの文書に出会って「ああ、これだったのか」と妙に合点してしまいました。まさに教会の比喻、教会はキリストの体として「動いている」。構想を掲げて教会形成していくのではなく、「そうなったように」その都度、自分たち自身を確かめていく私たちの歩み方です。

「あなたは眠りの中に人を漂わせ、朝が来れば、人は草のように移ろいます。朝が来れば花を咲かせ、やがて移ろい、夕べにはしおれ、枯れて行きます(詩編 90:5～6)」。十字架の傍らで咲くホタルブクロのように、単体の生命としては完結せず、個々を超えた群として移ろっていく主なる神の業。来年はまた思わぬ所で咲くかもしれません。

クレマンは最新の著作『第三風景宣言』(2024年 共和国)でこう語ります。「放棄地(第三風景)から生じた森林はつねに、管理された森林よりも高い多様性を有する／第三風景は単純な時間的曲線ではなく、当の環境の生物的様相にしたがって進化する」。放棄地のごとく、どこまで多様な「動いている教会」に成りうるか。聖霊の風によって、ここで生じる出来事一つひとつが問いとなり、試みになるでしょう。

森も、野も、庭も、あふれる生命に圧倒される夏。山野草の種類を知るほどに、草刈りの手間はかかるようになりますが、まだまだ知らない種類があることを歓迎し、一つひとつ覚えていきたいと思います。Ω